

# 1960 年代から 1970 年代における性メディア

## ー深夜ラジオと女性週刊誌の比較検討からみる

### セクシュアリティの解放と抑圧

堀之内 柊太

1960 年代から 1970 年代は深夜ラジオブームであった。受験戦争の激化する中、トランジスタラジオによるリスナーの個人化、ラジオ局の戦略であったオーディエンス・セグメンテーション、ナマ・ワイド番組の登場、そしてパーソナリティの誕生により、深夜ラジオはブームを迎える。深夜ラジオは「若者の解放区」、そして「性の解放区」としての役割を担っていた。しかし、その「性の解放区」における性的表現の内容は男性的なものが多く、若年女性に向けた表現はあまり見られなかった。つまり、深夜ラジオは若年女性を排除していたと考えられる。しかし、男性と同様に若年女性にも性的関心や興奮は存在していた。加えて、若年女性への性の抑圧も存在していた。そんな抑圧の中、「性の解放区」という深夜ラジオに排除されていた若年女性たちの受け皿になったのが女性週刊誌である。本論はその女性週刊誌の中でも、女性読者数が最も多かった『女性自身』に目を向け、1960 年代から 1970 年代の若年女性がどのような性的表現を用いて、抑圧された性的関心を解消していたのかを明らかにした。

深夜ラジオについて書いている書籍や雑誌の分析から、深夜ラジオの性的表現には「ユーモア」というフィルターがかかっていたことが分かった。また『女性自身』の性的表現の分析から、『「体験談」「小説」パターン』、『「性のハウツー」パターン』の文章的な性的表現と、『「視覚的」パターン』の視覚的な性的表現の 3 パターンが確認された。また、「体験談」や「性のハウツー」パターンにおいて、「結婚や初夜において必要である」というフィルターがあることが確認できた。

深夜ラジオの「ユーモア」というフィルターは、リスナーの抱える不満や不安を解消する役割を担っていたと考えられる。受験戦争を控えるリスナーにとって、堅くて真面目な表現よりも、「ユーモア」のフィルターを通したばかばかしい表現が必要とされていたと考えられるであろう。『女性自身』の「結婚や初夜において必要である」というフィルターは、女性週刊誌が結婚入門書としての役割を担

っていたことが要因であると考ええる。このフィルターは、当時の女性へ課せられていた純潔などの性規範を回避する役割を担っていたと考えられる。堅く、真面目な性的表現と「結婚や初夜において必要である」というフィルターによって、女性が性的関心を解消することを手助けしていた。

深夜ラジオと『女性自身』の性的表現に、共通点は余り確認できなかった。相違点としては、それぞれ性的表現を違うフィルターを通じて行っていたことである。またそのフィルターを通すことによって、深夜ラジオは「間接的な性的表現」となり、『女性自身』は「直接的な性的表現」となっていることが分かった。これは、男性が直接的、女性が間接的な性的表現を消費するというステレオタイプとは逆であることが明らかになった。